

## 戦後のブロークンジャパニーズを自然習得の観点から再検討する

首都大学人文科学研究科

ダニエル・ロング

キーワード：自然習得、言語接触、ピジン日本語、非母語話者同士の日本語使用

### 1. はじめに

半世紀前の韓半島で、日本語を一つの起点言語とする接触言語が地元人の韓国語話者と米兵の英語話者とのコミュニケーション手段として使用されていた。この接触言語のデータが社会言語学の教科書に記載されるなど、その存在が広く知られているが、その分析が行なわれていない。

この接触言語の中身を見ると、英語と日本語さらに韓国語の三つの言語要素が複雑に絡み合っている。当時は、単なる「ブロークン」なことばとして軽蔑の対象になっていたが、その文法構造を見ると、いくつかの傾向が見えてくる。また、近年の言語接触論の発展とともに非母語話者による日本語の自然習得や日本語のピジン（カイザー1997,2005）やクレオール（真田&簡2008）が注目をあびている。

本発表で検討する「間に合わせの言語」(makeshift language)は、戦後の韓国で一時的な言語手段として使われていた。それに関する古い資料を再検討する(Algeo 1960, Goodman 1967, Norman 1954, Norman 1955, Webster 1960)。これらの論文を執筆したのは人類学やスラングの研究者で、分析もこれらの研究領域のものに止まっているが、本稿でこの接触言語現象を自然習得や言語接触論の観点から再検討する。

### 2. 接触言語に見られる単語

Webster(1960)は、朝鮮戦争中の韓国において、米軍と韓国人との間に使われていたとされる接触言語を紹介し、データとして、その言語変種で語られているシンデレラ物語を提示している。この言語変種を「バンブー・イングリッシュ」（竹の英語）と呼んでいるが、単語レベルを見ると、英語以外にも日本語と韓国語が混じっていることが分かる。

1. *Taksan years ago, skoshi Cinderella-san lived in hootchie with sisters, poor little Cinderella-san ketchee no fun, hava-no social life. Always washee-washee, scrubee-scrubee, make chop-chop. One day Cinderella-san sisters ketchee post cardo from Seoul. Post cardo speakie so: one prince-san have big blowout, taksan kimchi, taksan beeru, play 'I Ain't Got No Yo Yo.' Cindy-san sisters taksan excited, make Cinderella-san police up clothes.*
2. Suddenly clock starts to strike 2400. Cindy-san has skoshi time, can speak only sayonara to number one prince before chogeying to oxcart pool to go home. She hubba-hubba home but lose Corcoran jump boot. Time to stop hava-no and number one prince ketchee.
3. 'What to lose,' speak Prince. 'Edewa shipsho bali-bali ugly jo-san.'

文は基本的に英単語からなっているので、英語が「マトリックス言語」となっていると言える。一方、日本語（イタリック）や韓国語（下線部）、ピジン英語（ゴチック）のそれぞれの単語も含まれている。英語の中にスラング(blowout=パーティ、hubba-hubba=急ぐ)や軍事用語(Corcoran jump boot=軍用のブーツ)が目立つ。

よく見ると英語と日本語の言語的要素が入り混じっているのは表面的な単語レベルだけではなく、より深い層においても混合していることが分かる。すなわち、日本語の単語形式の場合でも、その意味(用法)が英語的なものからなっている例もあることに気づく。例1に見られる *taksan kimchi taksan beeru* のように名詞修飾の例は日本語に近いが、*taksan excited* のように動詞を修飾する場合や *taksan years ago* は日本語にはない用法である。逆の例も見られ、*number one* の形式は英語だが、その背景にある意味(発想)はむしろ日本語(一番)と言えよう。

英語の発想が *skoshi* の用法にも見え隠れしている。例2の *Cindy-san has skoshi time* は日本語の少しに近い用法だが、*boot slide on skoshi foot* や例1の *skoshi Cinderella-san* (小さなシンデレラ) や英語の干渉が見られる。以下の表1のように「小さな」も「少し」も英語の *little* に当たるため、*skoshi* が *little* と同じ意味領域で使用されていることが分かる。

表1 *skoshi* の意味領域

少し	little, skoshi
小さい	

もう一度強調したいが、Websterが紹介しているこの日本語混じりの接触言語は、日本で使われたものではなく、韓国で使われたものであった。それはすなわち、韓国人とアメリカ人との間で日本語がコミュニケーション手段(の一つの要素)として利用されていたことを意味する。

Algeo(1960)も韓国にいた米兵が使用した接触言語がテーマだが、例4と例5のように一人称代名詞として *watashi* が使われているものがある。

4. *Taksan dai jobee with ol' watashi.* (俺はそれで全然構わないよ)
5. *Watashi's ipsumida with aboji's SOP's.* (俺は曹長の規則はもううんざりだよ)

### 3. ピジンの要素

このデータに一般的なピジン英語に見られる要素が複数見られる。重複化 (*washee-washee* = 洗、洗濯、*scrubee-scrubee* = 擦る) はピジンによく見られる語の形成方法である。また、*chop-chop* (食べ物、食べる) は19世紀から太平洋のピジン英語に広く見られる単語で、現代日本語の「ちやぶ台」もこの語に由来すると思われる (カイザー1997、2005; ロング1999)。

文法面では、主語も目的語も省略しているステレオタイプのピジン英語と言える *long time no see* に類似する例6も見られる。

#### 6. *Prince try taksan feet in boot - all time no fit.*

「多義語化」という現象は自然習得者、あるいは(教室内習得の場合でも)初級者に見られる。さらに、固定化した形でピジンにも見られる。これは、使用語彙数が限られているため、同一の単語を多数の意味合いで間に合わせ的に使用しようとする現象である。以下の例で *ketchee* (英語の *catch* に由来する) がたくさんの意味で使われている。上の1の *ketchee fun* (得る) *ketchee post cardo* (受け取る) や2の *prince ketchee* (拾う) に加えて以下の例7~例13が見られる。括弧内は文脈から判断した日本語訳である。

7. Sisters go blackmarket **ketchee** fatigues (買う)
8. I **ketchee** you number one outfit (与える)
9. Cindy-san **ketchee** one mouse and one mousetrap (持って来る)
10. **Number-one** prince *meda-meda* for *jo-san*, . . . **ketchee** and marry, make **number one jo-san** in Korea. (つかまえる)

#### 4. 表記から推測できる音韻的要素

Websterに掲載されているシンデレラ物語は言語学が記録したデータではなく、兵隊がジョークのために書き留めたものである。厳密な分析には向いていない。しかし、それでも、いくつかの推論が可能である。

英単語が日本語の音韻体系を反映したつづりになっている *post cardo* や *beeru* の例が見られる。ここで興味深いのは、これらの発音はいわゆる韓国語なまりではなく、日本語なまりの英語である(韓国語なら、*cardu*、*beer*の方が近い)。この言語変種は韓国で生まれたのではなく、むしろ戦後の日本に滞在していた米兵と日本人との間で慣習化されてから(Goodman 1967, Norman 1954, 1955参照)、朝鮮半島に渡った米兵がそこへと持ち込んだと思われるのである。

米兵は日本語を自然習得していたにも関わらず、日本語の開音節構造(*card*, *beeru*, *ketchee*, *speakie*など)に気づいて、子音で終わる単語に母音を付けていたが、一方、日本語の母音無性化現象にも敏感であったことは *taksan*, *skoshi* (または *skosh*) の例から窺い知ることができる。

#### 5. 接触言語に見られる文法

さらに深く掘り下げてみると、表面的に英語になっている箇所でも、単語をつなげるルール(統語論的部分)がむしろ日本語や韓国語に起因しているところが見えてくる。例11~例14を見よう。

11. *Cinderella-san ketchee no fun* (訳: シンデレラは楽しさを手に入れることはなかった)
12. . . . *hava-no social life* (訳: 社交生活は皆無だった)
13. *She speak: "Cindy-san, worry hava-no."* (訳: 彼女は「シンディーさん、心配要らないよ」と言った。)
14. *Time to stop hava-no, and . . .* (訳: 立ち止まる時間がなかった . . .)

四つの例は一見同一の構文をもっているように見えるが、11と12の *no* は名詞の前に付く否定冠詞であるのに対して、13と14の *no* は動詞のうしろに付く否定辞となっている。11と12は標準英語でも可能な構文であるが、13と14はネイティブな英語では許されない構文である。そして、13と14は英語よりも日本語や韓国語の語順に近い(心配+要ら+ない、止まる時間+持って+いない)。次の3点を考えると、このバンブー・イングリッシュで採用された否定構文は、韓国人(日本人)と英語圏人の両側にとって容認しやすいものであった。すなわち、(1) 韓国人(日本人)にとって分かりやすく、使いやすい「動詞+否定辞」の語順になっている。(2) 語順(文構造)のバリエーションがなくて、「動詞+否定辞」に統一されている。構文を一つだけ覚えれば良くて、学習負担が軽減される。(3) 標準英語では「否定+動詞」の語順が無標である

(Cinderella did not have any fun)が、13や14のように「動詞+否定」の語順も(有標でありながら)文法違反にならない形として存在しているから、この用法を過剰般化しているという見方もできる。

ここまでの文法事項は韓国人や日本語による英語の自然習得を反映していると思われるものであるが、逆に米兵による日本語の自然習得の結果だと思われる表現もある。例10や15のmeda-medaは日本語の「見た!見た!」に由来すると思われるが、この表現の文法的意味が理解されなく、「look」という意味のあらゆる活用に使われている。

15. Then wave wand again one time and old rubber shoes **changee** into polished Corcoran jump boots. “Meda-meda,” say Cindy-san. “Number one.”

さらに、興味深いことに、日本語や韓国語が英語と混合され、一つの複合的な表現になっているものがある。10のmeda-meda forが英語の“look for”(探す)の意味で使われる。また、例2に見られるchogeyingは韓国語の語幹に英語の進行形が付けられている。韓国語で移動表現に使われるtchok-i(あそこへ)が動詞と誤解されたのではないかと思われるが、その意味は「運ぶ、行く、あわてて逃げる、急いで去る」などと訳されている。

## 6. 自然習得の日本語

本発表で取り上げた接触言語には次の興味深い点が見られる。

- (1) 日本語の要素が多いが、第3者である韓国人と米兵との間のコミュニケーション手段として使われた。この現象を「日本語教育史」ならぬ、「日本語習得史」の中で位置づけることが重要であると思われる。
- (2) taksanのように意味(機能)が拡大された語や、skoshiのように日本語の単語形式を英語の意味領域で使用される例が見られる。
- (3) 表面的に英語に見える語句でもnumber oneのように、日本語の語形成を模写している単語が見られる。
- (4) 英語の要素を日本語の音韻体系に合わせようとするところが見られる。この適合が英語起源の外来語(cardo, beeru)に対しても行なわれる。

### 【参考文献】

- 真田信治・簡月真(2008)「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4巻2号
- カイザー、シュテファン(1997)「Yokohama Dialect日本語ベースのピジン」『国語研究論集(東大国語研100周年)』83-106
- カイザー、シュテファン(2005)「Exercises in the Yokohama Dialectと横浜ダイアレクト」『日本語の研究』1巻1号
- ロング、ダニエル(1999)「地域言語としてのピジンジャパニーズ —文献に見られる19世紀開港場の接触言語」『地域言語』11:1-10
- Algeo, John T. (1960) Korean Bamboo English. *American Speech* 35: 117-123.
- Goodman, J. S. (1967) The Development of a Dialect of English-Japanese Pidgin. *Anthropological Linguistics* 9.6: 43-55
- Norman, Arthur (1954) Linguistic Aspects of the Mores of U.S. Occupation and Security Forces in Japan. *American Speech* 29: 301-302.
- Norman, Arthur (1955) Bamboo English: the Japanese influence upon American speech in Japan. *American Speech* 30.1: 44-48.
- Webster, Grant. (1960) Korean Bamboo English Once More. *American Speech* 35: 261-265.